

大平正芳氏の派閥観

宇治 敏彦

「政界は、ジェラシー（嫉妬）の海だよ。人間が三人集まれば、二つの派閥が出来る」 時に触れて大平正芳氏の口から飛び出した言葉だが、同氏は政治活動における「派閥」の存在を決して否定的にはとらえていなかった。この一文を書くに当たって、「政治家・大平」の言動を改めてトレースしてみると、彼がその効用を認めていた派閥には次の三つのカテゴリーが浮かび上がる。

第一は、政治家ないしは政治集団の活動の根源である政治的エネルギー、活力を生む場所としての派閥効用論。

第二に、政治権力（総理・総裁、党執行部など）の独裁をチェックする機能としての集団。

そして第三には、サロンないしは勉強会的に気心の知れた者同士が、自由にモノを言い、親睦を深めるとオアシスとしての効用論。

冒頭の「三人集まれば……」発言も、「政界とはそういう非情な世界なのだ」といった大平氏の東洋的諦観の心境と同時に、「三人が一人ずつバラバラだったら孤独だが、二人寄れば哀歓を共にできる」という前記第三のオアシス論も含まれていたのではないかと思われる。

筆者の取材メモによれば、大平氏の派閥観は佐藤誠三郎東大教授らの「イエ」に関する研究に触発されている部分がある。「三木おろし」が自民党内で本格化し始めた昭和五十一（一九七六）年五月六日の私

邸夜回りで大平氏（当時蔵相）は、政治の近代化に関連して派閥について次のように述べた。

「ロッキード事件について外国人記者からインタビューを受けたが、『事件が一過性的なものか、日本政治の構造的なものかは自分には良く分からない。一過性のものであることを望んでいる』と答えておいた。日本は西欧並みに近代化されていないところに、強みがある。『中央公論』三月号に佐藤誠三郎氏ら若手の学者がイエ（家）の研究を書いているが、『家』とか『派閥』といった、近代化されていない点に日本の強みがあるんだ。自民党だって派閥があるから活力がある。近代化政党にしたら自民党は共産党くらいになる。大平派だって毎週木曜日に集まって、アットホームに話し合っているからいい。これが『個』と『党』だけになったら、どうなるのか。わが家にだって派閥がある（笑い）」。

それからしばらくしての五月二十九日、大阪を訪れた大平氏は、関西財界人との会合で講演し、「みそぎ論」を展開した。ロッキード事件への大平氏なりの対応であったが、その論理立ては、「イエ」の論理の延長でもあった。

「日本の政治の活力は、イエ的原理にあるのではないが。個人個人ではなく、家に対する忠誠を第一に置く。家を大きくしたものが企業であり、政党であり、国である。企業別組合、終身雇用といった制度は外国にはない。ビジブルなものには乏しいが、こつした目に見えない所に日本の活力があるのではないか。自民党の改革が話題を呼んでいる。派閥の問題を聞かれるが、派閥があるとかないとかが問題ではなく、問題はその政党が今の時代に課せられた課題にどれだけの対応力を持っているかが問われている。政党が厳格な党紀、精緻な組織を持っている立派な近代政党であっても、天下を預かる力量を持っていないければ困る。一つの商品しか売れない自民党ではなく、いろんな商品を売る自民党でなければならぬ。専門店ではなく、壮大なデパートでなくてはならない。

また党の名譽、活力、規律を守っていくために、我々は絶えず謙虚に反省し、心身を洗い直し、しよちゆう「みそぎ」をする心構えでなくてはならない。

後年、大平氏が総裁選挙出馬に当たって掲げた「複合力の政治」という理念は、以上のような「イエの論理」、派閥観に裏打ちされている。

「自由民主党の活力の源泉は、党内に自由で多様な見解がつねに活き活きと息づいており、それが無数のパイプを通して日本社会のあらゆる階層、職能、地域と結びついていることである。私はこの自由でゆたかな源泉から汲めども尽きない国民の創意とエネルギーがあふれだしてくるような政治こそ、これからの日本を戦後第二の黎明期にむかって出発させるエンジンの役を果たすものと信じる。」『複合力の時代』から。

「非近代」ないしは「脱近代」が日本的エネルギーの源泉であるという大平氏の歴史観は、「ガンは完治したが、生命は朽ちた」の裏返しでもあり、いかにも大平氏らしい表現と言える。

派閥の評価が時により微妙に変化

だが、派閥のエネルギーを認めつつも、その時々ポジションによって、同氏の発言にも微妙な変化がみられる。

たとえば、「派閥解消」をした福田内閣のもとで自民党幹事長を務めていた昭和五十三年二月当時、秋の総裁大選との関連で派閥復活ムードが高まってきたことに、「自由新報」のインタビュー（五十三年二月十四日付）で次のように答えている。

「派閥が批判される理由は、それが党の主体性を侵す危険があるからだと思う。政党だけに限らず、どのような人間集団にあっても、そのなかの派閥的勢力がその集団の方針を曲げることがあってはならない。

こうした弊害が起こらないようにするためには、党の主体性を強めることが必要だ。党の主体性を強め、権威を高めていけば、弊害は陽光に消える雪のように消えていくと思う」。

しかし、その四か月後、総裁選挙が迫ってきた時の「サンデー毎日」のインタビュ（同年六月十八日号）では「幹事長は派閥解消に消極的と聞きますが、派閥は有用なんですか」との質問にこう答えた。

「派閥が党の土俵を割る、というか党の主体性を壊すとすれば、これは許されないことだ。しかし、派閥があるということは、逆にいえばその党が独裁政党ではないということではないか。いろんな分派の行動を容認することは、党の独裁化の歯止めになっていると思う。確かに派閥は、必ずしも政策を一つにする分派とはいえない。しかし、ある政策が問題になったとき、オレはこう思う、いやこうだと議論して一つのコンセンサスを練っていくとすれば（派閥は）ずい分貴重な役割をしていることになる。党と派閥の關係はだねエ……（と紙を取り出して太陽を中心とする惑星のような図を書きながら）党と派閥は、一定の距離を保って常に緊張した關係にあるんだ。この緊張關係が切れてとんでもない方向へ派閥がとび出すようでは、問題だけだね。党と派閥は、楕円形の二つの焦点みたいなものだ。政党は同心円ではないと思うよ」。

前者のインタビュでは「派閥が党の主体性を侵してはいけない」旨が強調されているが、後者のインタビュでは「派閥は党の独裁化の歯止め」という論点が前面に出ている。

これは前者では党幹事長、後者では総裁候補を自覚してのことと思われるが、同時に昭和五十三年二月当時はまだ「大福蜜月」の名残があったが、同六月ごろには福田首相の「解散示唆」「再選への意欲」発言もあって大福關係が冷え始めていたことも、論点の違いをもたらす心因だったと想像できる。

同年秋の総裁公選当時にマスコミの関心事の一つは、「政党と派閥」の關係に向けられた。大平氏は、ここでも派閥のメリット、デメリットの両面に言及している。

「現実の水はエ〇ではない。蒸留水ではないんで、人間の社会もそんなに純粹じゃない。派閥的活動というものは、いい方向に働けば許容できるのじゃないか。これが人事その他でエゴイズムに走ることがあれば、矯めていかなければならない。派閥的活動は人間の集団にはある程度、避けがたいものがある。」
(同年十月二十二日、日経)

「いろいろな人間の活動様式はいろんな形をとっている。派閥的動きは、いい悪いの判断は別にして現にある。派閥が党の調和、秩序を乱し、主体性をこわすことがあつては大変だと思う。派閥有用論を唱えているわけではない。」(十月二十二日、読売)

プラスとマイナスの両面を熟知

大平正芳という政治家は、ソッレン(理想論)とザイン(現実論)の両面を常に考慮しつつ行動したように思うが、「派閥」についても、そのプラス面とマイナス面をよく承知していたのではないか。昭和五十二年四月二十五日の党改革・躍進総決起大会における報告で大平幹事長(当時)は、派閥のことを「宿弊」と表現している。派閥の持つ活力と弊害がないまぜになったものが、大平氏の派閥観であり、それが「宿弊」という表現になったものと思われる。

彼が派閥を自らの政治活動のエネルギーとして直接的に意識したのは、前尾繁三郎氏から宏池会会長をバトンタッチした時である。

「権力というものが、それ自体孤立してあるものではなく、権力が奉仕する何かの目的がなければならぬはずだ。権力はそれが奉仕する目的に必要な限りその存在が許されるものであり、その目的に必要な限度において許されるものだということだ。」(昭和四十六年三月九日、日経)

派閥が権力奪取のための一つの手段とすれば、派閥それ自体にも当然「奉仕する目的」がなければなら

まい。派閥の目的は、自民党内において考え方や利害が共通する政治家たちが集まって、その代表を総理総裁に押し上げていくことにあるとされてきた。

確かに、「八個師団」や「三角大福中」の時代は、その傾向が顕著であった。しかし、田中角栄首相が退陣後の「田中派支配」、竹下登首相退陣後の「竹下派支配」は、最大派閥が自分のところからは総理総裁を出さず、他派の候補を担いだ「ねじれ現象」に問題があった。東京佐川急便事件をきっかけとする政治の混迷、その中での竹下派分裂は、明らかに派閥政治という「宿弊」が制度疲労を来していることを物語っている。また、派閥の意味するところが、共通の考え方の実現というより個々の議員の利害の実現へと変質しつつある。しかも平成五年（一九九三年）の衆院総選挙における自民党の敗北で、一九五五年体制が崩壊し、細川連立政権の誕生に伴い自民党が野党に転ずると、自民党の派閥も無気力状態に陥った。派閥解消論も強まっている。いま大平氏が生きていたら、今日の政治をどう論評したであろうか。

大平氏が活躍した時代は、自民党「一党支配」下でよくも悪くも「派閥」が派閥として機能した時代だったともいえる。強力な反主流派派閥を失った総主流派体制では、派閥の存在意義はほとんど無きに等しい。「活力の源泉」「権力のチェック機能」「心のオアシス」という、大平氏の三つの派閥効用論は、派閥が本来的な姿で機能した時に初めて言えることなのではないだろうか。その半面、派閥の弊害として大平氏自身が首相在職中に派閥抗争の海の中で「戦死」したことも忘れてはなるまい。

（東京新聞編集局長）